

平成 28 年度 舞鶴市総合教育会議 会議録

◎開催日時 平成 28 年 6 月 21 日（火）午後 2 時～3 時 40 分

◎開催場所 市役所本館 4 階第 2 委員会室

◎出席者 舞鶴市長 多々見 良三

教育長 佐藤 裕之

教育委員 荻野 隆三

教育委員 小瀬木 良和

教育委員 荒木 穂積

教育委員 南 賀子

教育委員 岸本 純子

1. 市長挨拶

2. 報告事項

教育振興大綱の事業計画書について

—事務局から協議資料を説明—（資料 1）

3. 協議事項

(1) 保幼小中連携による教育の進め方について

<主なテーマ>

- ・乳幼児教育の充実
- ・保幼小の連携（接続）
- ・小中一貫教育
- ・学力向上対策
- ・特別支援教育
- ・教員の資質向上
- ・親への支援

—事務局から協議資料を説明—（資料 2）

<意見>

(市長)

- 子どもの教育について、特に重要だと思っているのは、就学前の乳幼児教育が最も重要だと思っており、それを土台にして小学校、中学校へ進み、そして自立していく。その土台となるのが乳幼児教育と思っており、舞鶴は教育のまち、特に“乳幼児教育

に力を入れるまち”とアピールする中で、形はできたが魂が入っていないので、これからいかに親御さんたちにこの重要性を理解していただき、また地域の方にも理解していただく中で、地域ぐるみで子どもたちを育てていきたい。

- 担当部署にはまだ言っていないが、私が前にいた病院では赤ちゃんに優しい病院ということで、赤ちゃんを母乳で育てることを推奨した。それは様々な就業形態があるので、どの人にもそのことを強制する思いはありませんが、母乳で育てることによる母親と子どもの密着した経験が、「大きくなって人から愛されている。自分を守ってくれている人がいる」といったことの原点になろうかと思っており、母乳で育てることを乳幼児教育の中に入れるべきかどうかはわかりませんが、私は入れるべきと思っている。
- 離乳するまでの時期も含め就学前にいかに力を入れていくのか、ということ由市全体で共有できるそういう体制にするにはどうしたらいいかを今一番考えており、年齢が大きくなればなるほど自立していき、高校生や大学生に説教しても一切聞いてもらえないので、まさに中学3年生までが勝負であり、それまでに大人となって必要な規律などを身につけ、親から一人立ちするということの基礎中の基礎を教え込めば、後は高校へ行けば一人で大きくなっていくと思っている。
就学前までの教育をいかに充実するか、それを土台として小学校や中学校でそれぞれが得意とする分野を伸ばすことによって、その得意とする分野で自立できるような子どもにしていきたいというのが私の思いである。
- もう一点は競い合うことの重要性も必要と思っており、それぞれが競い合うことによって自分の特徴は何か明確になり、得意とするところを伸ばしながら苦手なところをできるだけ並みにするという点においては、競い合うということが重要。中学校の統一テストにおいて、市内の中学生を持つ親御さんの3分の2近くは、自分の子どもの点数と市内で何番目かに位置するのかという部分の学力の位置付けができるということについては評価をいただいていると思っている。
- それから、学力だけが全てではありませんので、レスリングに取り組んでいる子どもたちや英語教育を頑張っている子どもがいますし、様々な教育環境でいろんな子どもの特徴を伸ばせられる環境を提供することが、われわれ行政がすべきことであり、その環境を生かして親や先生が子どもの特徴を把握する中で伸ばしてあげることが重要である。
- 乳幼児教育に力を入れたいと思っており、多様な教育環境を提供しそれぞれの子ども

もが伸びて自立できる子どもを育てていきたい。それをどうやって進めたらいいのか、具体的な各論的なアドバイスを委員の皆さんからいただければと思っている。

(荒木委員)

○ 私も乳幼児期のスタートが非常に大事で、そこでしっかり育てられれば、中学・高校に進めばより素敵な人格を形成してもらえるのではないかと、そういう意味でもすごく大事と思っている。

○ 舞鶴市の保育園・幼稚園に子どもが通っている親御さんへの調査の中で、子育てで悩んだ時に、最初に誰へ相談するか。やはり一番多いのは家族、パートナーや同居しているのであればおじいちゃん、おばあちゃん、非常に興味深かったのは2番目に相談するのが園長先生であり、幼稚園は単に子どもを教育する場だけではなく、親御さんにとっては子育ての勉強の場になっていることや、いろんなことを相談するという役割を持っているのを改めて知らされている。

今回の乳幼児教育ビジョンの中で、先生の研修を位置づけて乳幼児教育の方向性を舞鶴市全体の水準を上げていくことは、非常に大事なことだと思っている。

○ 気になったのは、専門家への相談が少なく、例えば医者や発達相談員、保健師など乳幼児期に係る知識が一番豊富な方への相談が少ない。保健師が子育てに関わりにくい環境にあるのか、保健師や発達相談員の人数が十分足りていないのか、医者が子育て相談に関わっていただく機会が無いのか、このあたりは検証する必要があるのではないかと。それらが総合的にうまく機能するようになると、乳幼児教育全体の安心感や子育てが楽しくなるような環境が作り出せるのではないかと考えている。

○ それと、0歳から15歳までの切れ目のない教育支援を進めていくことが非常に大事である。大綱の中でも出ているが“小1プロブレム”の解消は、幼稚園・保育園から小学校へあがっていくときの1年生が非常に大事で、幼稚園・保育園の様子とうまく小学校に情報が伝わっていく。そのためにも幼稚園・保育園の先生と小学校の先生が顔見知りや日頃からいろいろな取組を通して、人間関係ができていくことが大事と思っている。

併せて、幼稚園の年中、年長になると発達障害、学習障害、あるいは多動傾向のある子どもたちがそういう傾向を克服していこうとするとその傾向が目立ってきて、小学1年生、2年生になった時になかなか席に座れないとか、学習の基本的な態度が十分できない。それが障害のせいなのか、家族のしつけのせいなのか、あるいは学校の先生の教育のせいなのか、互いに意見が出しにくいような状況が多分“小1プロブレム”が解消しにくい一つの要因となっていると思う。

- 舞鶴市は非常に早い時期から個別指導計画、個別支援ノートを導入されており、これをうまく活用して移行支援プログラムに乗せていく、そういう取組の形が整ってから5年ぐらい経つと思いますが、その取組を生かして障害があるかないかだけではなく、支援の必要な子どもたちは障害があるかないかに関わらず、きめの細かい支援ノートや支援の情報をうまく小学校へ伝えていくことが、質の高さの基礎になるのではと思っている。

(小瀬木委員)

- 先日、私立の幼稚園の園長先生とお会いすることがあり、幼小連携のことについてお話を聞かせてもらったが、その幼稚園には年長組と小学6年生の交流があり、子どもたちが一緒に園庭のお花を植えたり、年長組が小学校へ行ったりしているとのことで、幼小の連携の一部がスムーズに行われていると痛感した。
- 先ほどの説明のとおり、保幼小の連携が大切ですが、私は私立の保育園と幼稚園の歯科校医をしており、歯科検診に行くと、先生たちが子どもたちに取り組む姿を見ると大変忙しそうなので、資料にある「乳幼児教育ビジョン」の指針に沿った“乳幼児教育センター機能”が発揮され、保幼小の先生のコミュニケーションや質の向上が図れるようになってほしい。保幼小の接続のカリキュラムが、大綱に沿って早く市民や乳幼児に還元できるようになれば良いと思っている。

(南委員)

- 保幼小中連携の乳幼児教育の部分は大人になるための大切な期間で、今、虐待の問題も出ているが、将来親になるかもしれない子どもたちのことを考えると、保幼小中の子どもの中に、赤ちゃんに接する経験があるかどうかで、大人になったときに赤ちゃんやわが子に対しての接し方も変わることもあると思われるので、保幼小中の期間を有効に活用してほしい。
- 親の支援という面では、保護者が子どもの乳幼児期に支援が必要かもしれない「要観察」という言葉を聞いた後、保護者が不安になったままということがあり、私も何件か相談を受けたことがある。保育士などに相談したいことが親の不安の要素になっている。一度この子どもは不安だなと親に伝えた後は、ずっと引き続き親をフォローしていく体制をぜひとってもらいたい。親の安定が子どもの安定に繋がるので、一つでも親の不安要素を無くしてほしいと思っている。
- 親の支援の一つにもなると思うが、子どもが安心安全に登下校することや、外で遊

ぶこと、習い事できるということはとても大事な要素とっていて、頻繁に不審者のメールが来たり、私の家に女の子が泣きながら駆けこんできたこともある。できるだけ未然に防げる方法として、登下校のところには防犯カメラをつけるとか、子どもたちが自転車で遊びに行けるよう自転車道路を考えると、何かしらこちらの方からも取組ができないものかという思いもある。

- 教員の資質向上ですが、市長が言われた学力テストの上位である北陸3県について、保護者の方からお隣の県はいい成績なのに真似できないのか、ということをよく言われていた。今回、教師を福井県へ1年間派遣するということが、それはいいことだと賛成のお褒めの言葉を多くいただいている。
- 最後に、誇りを持てるわがまちづくりということで考えると、観光、文化、環境の面において、特に観光という部分で、最近、非常に舞鶴市がテレビに映ることが多くなっている。周りから取り上げていただくと単純に自慢に思うので、より取り上げていただけるようなまちづくりをお願いしたい。

私は都会で生活していたので、移動については1時間といわず1時間半でもいいという感覚であり、保護者や子どもに対して、通勤・通学は1時間前後でもありということをいろんな機会でも話してもらおうことが、地元に残るという一つの選択肢が生まれてくると思っている。

(岸本委員)

- 中学2年生を対象に、市長の「ふるさと舞鶴講義」で舞鶴の自然、産業などの話を聞いて、子どもたちが夢を持つきっかけになっていると思っている。
市長講義の際に集計されたアンケートの結果について、中学2年生のいろんなことがわかり、舞鶴に対する思いが見えてくることで、今後の対策にも繋がるものと思っている。
それと同時に産業に関して、資料には京都府北部(5市2町)の従業員数100名以上の事業所が出ているが、子どもたちに各産業に携わる専門家から直接お話を聞かせる機会があれば、将来の自分を考える折に大変役立つと思うので、ぜひそういう機会を実現させていただきたい。
- 乳幼児教育について、大綱では“0歳から15歳までの切れ目ない質の高い教育の充実”という基本理念があり、昔から「三つ子の魂百まで」と言われており、そういう気持ちで0歳から育てていくことが大切だと思っている。そのためには、家庭、地域そして学校が協力して作り上げていかなければいけないとっており、行政の施策の中で「市長の中学生講義」のように、ぜひ保護者、地域に向けて、市長から直接、教

育に対する思いを話していただければ、市全体で協力できる体制になると思うので、お忙しいとは思いますが検討いただけるとありがたい。

- 保幼小中連携の進め方の中で、教員の資質向上で福井県に1名派遣するということは賛成である。一方で、知人から教員は帰りが遅く学校のことで一杯になり、家に帰ってきて自分の家庭の生活を考える余裕が無いと聞いたとことがあり、個人差はあると思うが、教員は昔に比べいろんなことに対応していかなければならないように感じている。

そのような中、質の高い教育、そして学力向上となると、これ以上に負担をかける先生方が疲弊されてしまうのではないかと危惧している。以前の校長会議でも話したが、ぜひ2人体制の担任でお互い協力しながら、子どもたちをどう教育していくかということを考えて、子どもたちをもっと密に見つめて育てていただけたらと願っている。

- 先ほど、荒木委員から“発達障害に関わらず専門家への相談が少ない”との意見があったが、同感である。私は小児科医ですが、これまでの診察で相談が2、3件あった程度である。健康診査の中で、チェックできて相談してもらえる体制を考えていかなければならないように感じた。

(荻野委員)

- 乳幼児教育ビジョンを読ませていただいたが、乳幼児期の保育、教育の根本的なことがしっかり位置付けられており、考え方を舞鶴市内の保育園、幼稚園の先生がしっかり理解して取り組んでいただきたい。

保育園や幼稚園は教科書の無い、それ以前の生活の中で、体験や遊びの中で学ぶところであり、今後、ビジョンの考え方に沿った保育や教育の具体的な実践事例のようなものがまとめられて、その取組が広がっていけばと思っている。

- 私は就学前の子どもの発達を支援する施設に勤めていますが、早期からの療育をすることにより、子どもたちが本当にいろんなことを時間はかかるが、獲得していく、伸びていく姿を目の当たりにしている。しかしながら、全ての課題が解決するわけではもちろんなく、就学期を迎えたときに子どもたちが学校に入り、どのようにその中で周りの先生たちから十分に理解をされながら、学校生活を送れるのかが非常に大きな課題である。繋ぎの取組を行っているが、保幼小中連携の中で“小1プロブレム”の問題は、全ての子どもに関わるが、発達支援の子どもはとりわけ環境変化に対応することの困難さを持っているので、その部分でのサポートが必要と思っている。

- 本市はにじいろ巡回個別支援システムで丁寧に、幼稚園や保育園の就学前の子どもたちを巡回し、専門家が現場の様子を見てしっかりアセスメント（評価）して、対応について先生にアドバイスをされている。ぜひ、にじいろ巡回で行っていることが就学後にも続いていくよう、小・中学校の巡回指導に拡張して取組を継続して進めていただければと考えている。
- 教育振興大綱の中で目指すべき子ども像があり、育みたいこととして、「ふるさとを愛する心やコミュニケーション能力、思いやりや親や周りの人に感謝する心、夢の実現に向かって力強く生きる力を育むことで二つのジリツを支える」というのは、不変的な価値である。その価値の中に、どのような内容があるのか。小学生であればこの価値について、このあたりまでは頑張ってもらいたい。中学生であれば、このあたりまで到達してもらいたいというような指標的なものを整理して、その指標に基づいて子どもたちが目標にすることや、自己評価する機会を持てればいいのではないかと考えている。

（２）地域と学校の協働について

- ・コミュニティスクールの導入
—事務局から協議資料を説明—（資料３）

<意見>

（市長）

- コミュニティスクールについて、私は全国の市長、町長が 60 人ほど参加している教育再生首長会議に出席しており、その会議において、この制度の説明があったが、平成 16 年度から始まったいい制度であるがなかなか増えない、増え方が良くないというのが実感である。地域に開かれた学校ということで、子どもを家庭や地域、学校総ぐるみで育てようという理念に乗っており、これが悪いはずがないと思っている。
- 舞鶴市では小中一貫教育の体制を作ろうとしているので、小中一貫教育と地域に開かれたコミュニティスクールを合わせて進めていく中で、多くの市民の皆さんに教育振興大綱や乳幼児教育ビジョンなど全てにかかわっていただければ、本当に良い教育システムができると思っている。私はコミュニティスクールを進めていきたいと思っており、どうやって進めていくのがよいか委員の皆さんと相談したいと思っているが、小中一貫教育と合わせて、コミュニティスクールを進めていくことが、より良い教育ができると思っている。今回は紹介のみですが、進めていく中で課題などが出たら相談したいと考えている。

(荒木委員)

- 教育委員会においてもいろいろ議論することではあるが、教育の重点では“地域との連携による教育・子育て支援の推進”という項目で、オープンスクールウィークに平成27年度は約8千人ですが、平成30年度には1万2千人を目標とするほか、学校支援地域本部を7中学校区全てに設立するなど、そういうことも含めて数値目標を実現する方法と、市長が言われた組織改革、コミュニティスクールに名乗りを上げてモデル校を作ってやっていくということと、一体化しながらやっていくと実現するように感じているので検討を続けてもらいたい。われわれ委員も一緒に頑張りたいのでよろしくをお願いします。

(南委員)

- コミュニティスクールについて、資料に舞鶴市の場合はアドバイザー会議の設置とあるが、私はこのアドバイザー会議とともに、新しい組織を作るのではなく子育て支援協議会など今地域の皆さんや組織から支援いただいている既存の力、活動をよりバージョンアップしていくような形がスムーズと、個人的には思っている。どうバージョンアップするかは検証の余地があるが、子育て支援協議会は小学校までであり、中学校以降からが地域とのかかわりが薄くなっていると感じるので、そのあたりでどういった組織を考えられているのか教えてもらいたい。

(教育長)

- この6月1日に、老人嶋神社の祭礼に初めて参加させていただき、改めて、地域の伝統行事に感動をした。大浦小学校の6年生が毎年参加していて、参加した児童が「ここに神様がいるという実感がありました」「小さなころから、大切な場所と教えられていた」と発言していた。その表現に感動したわけですが、家庭でお父さんや祖父さんなのか代々教えていただいたのではと思っている。当番の区長さんは、「波が高かったが、無事終わって肩の荷が下りた」と言われていた。江戸時代から続く、大漁、豊漁、海の安全を願ってやってこられた、大きな責任の立場から言われたことと感じた。

この行事を通して、教育は繋がりを無くしてできるものではなく、保護者、地域、子どもと繋がってもらっている全ての人が、子どもたちにかかわっていくという教育、組織が必要と感じた。

意見があったように、アドバイザー会議や学校支援地域本部もあり、一定、学校や校長先生が求めることにより、それに答えていただける立場の組織と思っている。

その中で、教育を取り巻く環境は難しくなっており、支援を超えて学校など地域が連携、協働して子どものために考える組織が、バージョンアップしていくことが必要になってきたと思うし、今後検討していきたいという思いを強く持っている。

(市長)

- コミュニティスクールと小中一貫教育を同時に進めることについては、当然既にある組織は活用すべきと思っており、新たに仕切り直しとは思っていない。既存のものを活用しながら、地域で子どもを育てる地域に開かれた学校ということをやっていききたい。

- これまで出ていた意見について関連してだが、子どもに対する不安については、「子どもなんでも相談窓口」という、保健師や社会福祉士、看護師などいろんな職種が共同で、ワンストップであらゆる相談に対応する窓口を作りました。
また、子どもが将来どういう職場に就きたいかということについては、子どもたちが職場体験をするということをやりたいと思っており、市役所の“行動元年”の三つの行動の中の一つとして、市役所が積極的に高校や高等教育機関と接触して、就職斡旋や就職案内をしている。西地区の工場の社長に会って地域の子どもの雇ってほしいと言ったら、水産高校や農業高校の子どもの雇いたいと言われた。早速、高校へ行って話した結果、雇用してもらった。このように、就職斡旋や具体的に仕事をしたいというイメージがあれば、それを実習体験でき、就職するにどういう勉強をすればよいか。そういう中で、そういった学校が北部5市2町にあれば、そういったところで勉強し就職する、そのような職場体験も考えている。

(3) ふるさと学習について

- ・ウズベキスタンとの交流の推進

<意見>

(市長)

- まちに誇りを持つということは重要ですが、地域に行くとお年寄りに「市長、ここはお年寄りばかりで子どもがいない。このまちは魅力もない。何にも無いまちや」と言われ、非常にがっかりした。
では、誇りを持ってもらうためにどうしたらよいか。一つは、観光でたくさん人が来るということは、まちにいいものがないと誰も来ないということで、観光に力を入れてきた。その結果、平成25年から27年の2年間で観光客が約50万人増えた。平成27年の観光客は253万人で、平成15年は114万人であり、この10年間で2倍以上に増えている。

- さらに、先日、本市が有する近代化遺産が日本遺産に決まりましたが、日本遺産は、

旧軍港4市が「日本の近代化を体験できるまち」ということで、日本の独立を守ったまちであること。さらにはその後、戦争が拡大し、そして終戦を迎え、当時海外にわが邦人が660万人いたその1割、66万人を最も長く13年間にわたり、引揚者を迎え入れた。その歴史が世界記憶遺産になったのであり、日本遺産と世界記憶遺産という、我々は明治以降、日本の歩みとともに密接に関係してきた誇れるまちと思っている。

- 世界記憶遺産となった資料を保管している引揚記念館は昭和63年に引揚者の皆さんが我々の体験を後世に伝えてほしいという熱い思いのもと、市が建設した。先人との約束を果たすため、何とか世界記憶遺産にすれば訪れる人が増えるということで、3年3ヶ月をかけて、昨年10月10日に登録された。

ちょうどその頃に、安倍首相がウズベキスタンを訪れた際に、引き揚げの資料を収集されて私費で記念館を開設し日本政府から外務大臣表彰を受けたスルタノフさんという人に、安倍総理が日本へ招待をされた。スルタノフ氏が日本へ訪れた際、最初に舞鶴の引揚記念館を訪れたいと言われて、今年1月に本市への訪問があり、市民との交流を深め、舞鶴とウズベキスタンが引き揚げの縁で繋がりを持った。

特に感動したのは、ウズベキスタンに抑留されていた日本兵は当時、発電所や劇場などの建設に従事していたが、絶対手を抜くことなく、しっかりと頼まれたものを造った。中でも「ナヴォイ劇場」は大地震にも耐え、日本人はさすが真面目で律義に仕事をするというので、日本人に対し尊敬の念を持っているということを知りました。ウズベキスタンの大統領は、母親から「日本人のように生きなさい、日本人のように努力しなさい」そんな言いつけを守って、今では大統領になれたと言われた。

- 今後、ウズベキスタンと交流していきたいと思っている。その一つのきっかけが、2020年東京オリンピックの時に、ウズベキスタンはレスリングが強い、そのレスリングチームをぜひ合宿に誘致したいので取り組んでいるわけですが、先日、国から本市がウズベキスタンとの交流を行う「ホストタウン」としての登録が認められた。引き揚げの史実の継承と、様々な国際理解教育、スポーツ交流、またウズベキスタンは発展途上国であるので、産業や経済等についても交流を持つことにより様々な支援や取組ができないかと思っている。

- 舞鶴の子どもたちに戦争の悲惨さや人類愛、家族愛、そういう中で我々の祖先は本当に温かい気持ちで接した。そういったことを子どもたちに学習させていきたい、そういったことをやっていきたいことを皆さんにお伝えしたいと思っている。ちなみに、ウズベキスタン料理を全小学校給食で出す取組も計画されており、私もウズベキスタン料理を食べたが日本の料理とよく似ている。ウズベキスタンはお茶の産地であり、昔は絹を作っており、舞鶴も蚕で絹を作ることも共通であり、お茶の文化や着るもの

も似ており交流を進めていきたいと思っている。

- これまで紹介したことが書いてある鳶信彦氏の本「日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた」がある。参考にしてもらえたらと思う。

<事務局>

大変貴重なご意見を、各委員からいただきありがとうございました。

ウズベキスタンに関しましては、今後引き揚げの史実の学習の中に盛り込むことや、小学校の給食で提供するなど、ふるさと学習の推進に努めてまいりたいと考えている。

閉会